

開催日 令和六年十一月九日（土）  
対面・オンライン并用開催（専修大學）

日本道教學會  
第七十五回大會要項

日本道教學會

## 日本道教學會第七十五回大會案内

拜啓 仲秋の候 ますます御清祥のことと拜察申し上げます。

本學會第七十五回大會を來たる十一月九日（土）に専修大學において（對面・オンライン并用）開催いたしますので、御参加くださいますようお願い申し上げます。

御參會の方は、十月三十一日（木）までに學會ホームページよりお申込み下さい（四頁参照）。

敬具

令和六年十月十日

日本道教學會 會長 森 由利亞

第七十五回大會準備委員長 鈴木 健郎

會員各位



## 日 程 表

日	時間	行事
8日 (金)	15:00~17:00	全国理事会（評議員も参加） 於1号館8階8A会議室
9日 (土)	9:15	受付開始
	9:45~ 9:55	開會式
	10:00~12:15	研究発表
	12:15~13:15	休憩
	13:15~14:20	研究発表
	14:25~15:25	講演
	15:30~15:40	閉會式
	16:00~17:30	總會
	18:00~20:00	懇親會

■大會參加費 無料

■開會式から閉會式までオンライン配信します。

（總會は配信しません）

質問等の発言は対面参加者を優先します。

■大學周邊には飲食店が多く、會場から至近にコンビニもあります。

## 大會參加方法について

本大會は対面及びZoomミーティングによるオンライン併用で開催いたします。

期間内に豫め「日本道教學會ホームページ」(<https://www.taostic-research.jp/>) から十月三十一日(木) 十一時までにお申し込みください。

対面参加の方は葉書でも申し込みを受けつけます。葉書に氏名・弁當の要否を明記して郵送してください。

(送料は各自御負擔ください)

オンライン参加の方には、後日ZoomのID・パスコードを記したURLを送信いたします。

御不明の點がございましたら、左記までお問い合わせください。

お問い合わせ：e-mail [thc0729@senshu-u.jp](mailto:thc0729@senshu-u.jp) (大會準備委員會事務局)

大會準備委員會電話：〇三ー三二六五ー六五六〇

専修大學國際コミュニケーション學部 鈴木健郎研究室

## 事前振込について

辨當（マイセンいろいろ辨當） 一〇八〇円

懇親會參加費 六〇〇〇円（學生・院生四〇〇〇円）

「日本道教學會ホームページ」で申し込んだ上で、そこに記された口座にお振込みください。



日本道教学会第七十五回大会参加申込フォーム／  
日本道教學會第七十五回大會申請表

第七十五回大會日程次第（十一月九日 土曜日）

午前の部（午前九時四十五分～十二時十五分）

挨拶

専修大學副學長

金子洋之かねこ ひろし

日本道教學會會長

森由利亞もり ゆりあ

大會準備委員長

鈴木健郎すずき たけお

研究發表

【第一部會午前】三階10031教室

郭象『莊子』注における「逍遙」理解と『周易』

伊藤 涼

（東京大學東洋文化研究所）

司會 辛 賢

（大阪大學）

古代中國における鬼神と命の相關關係の變化——墨家類の文獻を中心に

金 スマロ

（東京大學大學院）

司會 大形 徹

（立命館大學）

『列仙傳』寧封子の「猶有其骨」からみるその死後復生の可能性——骨からの復生を中心に

許 曉璐

（立命館大學）

司會 竹宮 英朗

（東京大學大學院）

《太清金液神丹經》卷下與早期南海歷史地理

韓 吉紹 (山東大學)

司會 垣内 智之 (京都産業大學)

【第二部會午前】四階10041教室

雲南道教長春派における玉陽施食科儀とその再編

范 玉愷 (筑波大學大学院)

司會 山田 明廣 (奈良學園大學)

道教における慈航(觀音菩薩) 觀について

陳 怡安 (駒澤大學)

司會 二階堂善弘 (關西大學)

論早期城隍神信仰的確立與流布

張 琦 (四川大學)

司會 張 九龍 (關西學院大學大学院研究員)

「二十四孝」における道教の影響——董永説話の織女のイメージを中心に

宇野 瑞木 (専修大學)

司會 前川 亨 (専修大學)

休憩 (十二時十五分～午後一時十五分)

午後の部（午後一時十五分～午後二時二十分）

【第一部會午後】三階10031教室

北京大學藏西漢竹書『周馴』の文獻的性格

司會

草野

友子

（大阪公立大學）

上清經の仙樂と魏晉音樂

司會

廣瀬

直記

（明星大學）

【第二部會午後】四階10041教室

林羅山の林希逸『老子膚齋口義』受容——林羅山『老子抄解』を中心に

李

麗

（名古屋大學博士研究員）

勞思光の術數觀——「義」と「命」をめぐる言說の一環として

司會

高田

宗平

（中央大學）

司會

水口

拓壽

（武藏大學）

宮崎

順子

（大阪公立大學）

休憩（午後二時二十分～午後二時二十五分）

第七十五回日本道教學會大會記念講演

フランス人と極東の認識<sup>コネサンス</sup>—ポール・クローデルを中心に

根岸 徹郎（専修大學國際コミュニケーション學部長）

閉會式（午後三時三十分～午後三時四十分）

總會（午後四時～午後五時三十分）

懇親會（午後六時～八時）

## 研究發表要旨

### 郭象『莊子』注における「逍遙」理解と『周易』

伊藤 涼（東京大學東洋文化研究所 特任研究員）

西晉の郭象（二五二年～三一二年）の『莊子』注は、「理」・「自得」などの概念を用いた體系的な注釋と言えるが、朱熹が「經を捨てて自ら文を作る」と評したように、『莊子』本文からは直接的には導き出し難い解釋も含まれている。そして、そうした郭象の『莊子』解釋の方針を最も端的に述べている言としては、「夫れ莊子の大意は、逍遙遊放、無爲にして自得するに在り」という『莊子』逍遙遊注の言葉を擧げられる。しかし、郭象がこのような『莊子』理解を行う理由について、先行研究ではこれまで十分な言及がなされてこなかった。そこで、本發表では郭象の『莊子』解釋の背景にある基本的な方針について、『周易』との關連性を手がかりに考察していく。

まず、第一節では、「逍遙遊放、無爲にして自得す」の理論に至る郭象の「物」理解を具體的に確認する。郭象の「物」理解の出発點は、物は突如としてみずから／おのずから生ずる、という「自生」の發想である。郭象は、物は「自生」によって得られたそのものとしての性質・機能（＝「性」）を離れてはならないとしており、「性」に

従つて動くことを物の理想的な状態としている。また、合わせて「自生」した時點で物の理想的な状態も決定しているといふことは、その時點でそのものがどのように生きていくべきか（＝「理」）についても決定しているとする。この理解が郭象の「物」理解の大きな特徴をなしており、「無爲」や「自得」といつた概念はこれらの理解を前提に成り立っている。すなわち、郭象は「無爲」を<sup>レ</sup>もちまへ以上のことは何もしない（こと）<sup>レ</sup>、「自得」を<sup>レ</sup>物がそれ自身で本來的（＝理想的）なあり方を得る（こと）<sup>レ</sup>として、物の理想的な状態は、物がそのものとしての本來的（＝理想的）なあり方を得て、それ以上のことは何もしていない状態であると説明したのである。

續いて、第二節では、こうした郭象の理解が『周易』の文章をもとにした理解である可能性が高いことを論じる。郭象の『莊子』注のなかには理想的な状態について「命」という言葉を用いる箇所がいくつかあり、そのうちの一つに「理を窮め命に致るは、固に至人の道と爲る所以なり」（『莊子』漁父注）という表現がある。これは明らかに『周易』説卦傳の「理を窮め性を盡くして、以て命に至る」という語が意識されている。つまり、郭象『莊子』注で用いられる「性」や「理」という語は『周易』に見える概念と共通するものと考えられるのである。それだけでなく、第一節で確認したことを敷衍すると、郭象の「物」理解は「理を窮め性を盡くして、以て命に至る」という構造がその根幹となつていふことが分かる。ここから、郭象は『周易』に含まれていた「性」や「理」の概念を「自生」の哲學によつて深めつつ、それをもとに「無爲」や「自得」といつた『莊子』の概念・理論も用いて、新たな「物」理解の提示を行ったものと考えられるのである。

古代中國における鬼神と命の相關關係の變化——墨家類の文獻を中心に——

金　スマロ（東京大學博士課程）

本發表では、古代中國における鬼神の存在と命論の相關關係の變化を、墨家類の文獻（『墨子』、『鬼神之明』など）を中心として考察する。

鬼神は一般的に人間がよく把握することができない神妙な存在、または祭祀の對象となる故人や先祖などを意味する。鬼神は人間の死後の存在という點では人間的であるが、同時に天の命を代理する存在という點では超越的でもあり、天と人間の間に存在する一種の媒介體としての役割も兼ねている。このような不可解な存在が戰國時代末期にどのように思惟されたのだろうか。特に天の法則と人間の運命を對象とする「命」概念の中で、鬼神の存在はどのように理解されたのだろうか？

『尚書』や『春秋左傳』では、人間が鬼神の意見を要請する場面があり、また物事の原因を追究する話の中で鬼神が登場する。このような場合、鬼神の存在はたいして吉凶禍福の兆しとしての側面が強い。そして、吉凶禍福を表す鬼神に對する諸子百家の立場は大きく無神論と有神論に分かれる。有神論の立場である墨家では、『墨子』明

鬼下で「故古聖王必以鬼神爲賞賢而罰暴」と述べ、鬼神の存在を通じて人間の徳行とそれにとまなう賞罰の執行を主張した。すなわち、上記の兆しとしての側面からさらに進んで、鬼神を命の遂行者として把握したのである。しかし、墨家のような強い有神論でなくとも、鬼神の存在を通じて物事の吉凶を問い詰める態度は、諸子百家全體で廣く見られる現象であると思われる。

しかし、墨子が非命篇で「有命者」と言われる運命主義者の主張を批判した點から、墨家では命の概念を否定したように理解されることが多い。実際には、墨子は天の作用全體を否定していない。そのため、天の作用を「命」として捉えるなら、墨家における「命」とは、墨子自身により否定された宿命主義の類を意味するものではなく、天が鬼神を媒介にして人間に與える吉凶禍福などを意味する。彼は過度な運命論を否定し、人間世界に介入する鬼神の存在を通じて、道徳行爲における人間の自律性とその當爲性を強調した。このような點を考慮すると、墨家における命（天の作用）とは、天の代理者である鬼神を通じて人間に與えられる「賞賢罰暴」の結果を意味すると見ることができる。

後に、このような墨家の鬼神信奉は、後期墨家の文獻と見られる「鬼神之明」で大きくその様相が變わる。「賞賢罰暴」が行われていない實例を通じて、鬼神が持つ命の主宰者としての側面が否定されたのである。そして、このような鬼神の存在に對する懷疑、または勸善懲惡的な秩序の矛盾を語る觀點は、單純に墨家だけの傾向ではなく、戰國時代末の様々な文獻に見られる自然やその主宰者の存在のあり方に對する懷疑に近いと思われる。

『列仙傳』寧封子の「猶有其骨」からみるその死後復生の可能性——骨からの復生を中心に

許 曉璐（立命館大學 東洋文字文化研究所）

最古の神仙列傳『列仙傳』の中に、尸解仙でもない、單純に死亡したようにみえる仙人が何人かいる。なぜ不老不死という一般的なイメージと違い、『列仙傳』の中にはこのような死亡した仙人がいるのであろう。本發表は『列仙傳』にみる死亡した仙人の寧封子の「猶有其骨」という記述から、「運命と骨」「魂と骨」「骨からの復生」という三つの視點から寧封子の死後復生する可能性を論じながら、初期神仙思想と原始信仰との關連についても探ってみたい。

古代中國において、骨に對して様々な神祕的な考え方がある。『春秋繁露』求雨には、巫を燃やし、死者の骨を取り埋めて雨を求める記述がある。『論衡』論死には、骨に死者の意識が残っているという思想がみえる。漢代には骨から運命を知るとい骨相・骨法の相術が流行っていた。魏晉から神仙思想も骨相の思想に影響され、仙人になるのには「仙骨」が必要という仙骨思想が現れた。このような人の運命は骨にあるという考え方の根源は、原始信仰における魂が骨にあるという思想に關連すると考えられる。

『新書』論誡・『莊子』至樂には「槁骨」「骷髏」が夢に入るといふ記述があり、骨が夢に入るのは、骨にも魂があるためであろう。なお、中國古代には動物の骨を用いて占う卜骨の文化がある。これは、魂が骨によりつくといふ屬性に關連する。新石器文化の仰韶文化遺跡にも巫師の骨を線で強調する繪が出土し、これは死者の復生を象徴するものであると考えられる。

中國古代において、死というのは魂が肉體と分離することであり、魂が肉體に戻れば死者が復生できるが、復生するには必ず肉體が必要である。放馬灘に出土した戰國時代の『墓主記』はその思想を表す文獻である。尸解仙の死後復生を論じる「太陰煉形」思想もこのような死生觀に基づくものである。骨の状態から皮肉が生えて復生する思想は漢代以降の『搜神記』などの文學作品の中にも多くみられ、古代中國の一般的な死生觀であると考えられる。

『列仙傳』の中で「數死復生」などの描寫を用いて、仙人の不思議な特徴を強調するところが多くみられる。寧封子は原始信仰における求雨のため、燃やされた巫を原型しているのかもしれない。當時の骨から復生するという死生觀からみれば、寧封子の「視其灰燼、猶有其骨」といふ骨を強調する描寫は、寧封子の死後復生を暗示する可能性があり得る。なお、『列仙傳』は最古の神仙列傳であり、その神仙思想はまだ鬼神思想・原始信仰からはつきり分離していない。寧封子にみえる巫の特徴も、骨から復生の暗示にみえる原始信仰の影も、その證據の一つであると考えられる。

## 《太清金液神丹經》卷下與早期南海歷史地理

韓 吉紹（山東大學）

《太清金液神丹經》卷下是東晉葛洪在親身遊歷南海國家的基礎上，吸收戰國以來的海外地理學理論和探索實踐成就，特別是漢魏時期的南海地理著述以及兩晉時期海外商旅人士的口述資料編撰而成，在史料來源及編撰方法上均有優長，是現存最早關於南海交通的專門著作。該書從實踐上有力推進了鄒衍“大九州說”的世界觀，開創了道教域外探索之先河，對傳世漢魏地理記載有重要補正作用，所記國家及物產有很多獨特資料，保存了很多早期南海與海上絲綢之路沿國間交通路線、里程、航船技術以及商業活動資料，集中反映了魏晉時期、佛教海外地理出現以前中國對南海與海上絲綢之路以及世界地理的認知。



## 雲南道教長春派における玉陽施食科儀とその再編

范 玉愷（筑波大學大學院）

長春派は明の時代、劉淵然が雲南省で創立した道教の宗派である。近代に入ると、戦争や文化大革命により傳承が一時的に途絶えた。時の経過に伴い、長春派は、二〇一〇年一月に雲南省昆明市萬壽宮で六〇年ぶりの「長春派傳度法會」を開催し、傳承を再開されている。二〇二〇年までに長春派では約二〇〇〇人の道士が得度しており、雲南省の主要な道教宗派になっている。蕭霽虹は、長春派が独自の「玉陽施食」「三寶科」「順星科」等の科儀を有し、特に「玉陽施食」は「玉陽祭鍊」とも稱され、施食、濟度類型の科儀に屬すると述べている。

だが、フィールドワークによると、「玉陽施食」は昆明地域の道教系葬儀で使用され、流行したものであり、初期には特定の道教宗派や傳承に歸屬していなかった。しかし、長春派が傳承を再開し、雲南で盛んに發展して以來、多くの有名な道士が次第に長春派に歸宗した。その結果、彼らの得意とした「玉陽施食」も長春派の代表的科儀となった。本來、多様な寫本で傳承され、多様な仕方で行われる「玉陽施食」は、長春派のエリート道士たちの關心を引いた。彼らは、かつて民間で廣まっていた「玉陽施食」を整理し、儀禮として論理的弱點やテキスト上の誤りを

を可能な限りに回避しつつ、新たな長春派の代表的「玉陽施食」科儀を創出している。「玉陽施食」は、再興された宗派の有識者による再編・使用と伴い、新たな活力を取り戻している。

一方で、劉仲宇は香港道教宮觀の『早晚功課經』を分析する際に、含まれる「玉陽施食」に言及している。「玉陽施食」の形成された時間が早く、明代初頭に相當の影響力をもたらしたと推斷できるが、現在かなり衰微して詳しく検討することができないと論じている。Vincent Goossaertは北京白雲觀を研究するうちに、「薩祖鐵罐施食」という死者救済儀禮に注目し、薩祖という人物が「玉陽煉度」とも関連し、その傳統が元明代まで遡ることについて問題提起をしている。蕭霽虹は雲南の「玉陽施食」を研究する際に、その内容として、主煉の天君は「南宮琰摩羅大將朱元帥」（玉陽南宮主帥で、寒林亡魂を管理の神）であり、一般の施食科儀は神虎、何喬を奉請し、亡魂を攝召し、水火交鍊を行うが、「玉陽施食」では朱元帥がこの職能を引き受けることになり、これは「玉陽施食」と他の施食科儀の一番大きな異なる点であると指摘している。

本発表は、以下の三點から先行研究を補充したい。一、歴史文獻に基づき、再編された「玉陽施食」とその内容を簡単に論じる。二、「玉陽施食」は、朱元帥、薩祖など神々の登場により、「鐵罐施食」科儀とかなり關係深く、同じ傳統の科儀とも考えられる。発表者は朱元帥、薩祖などの神の登場を手掛かりに、「玉陽施食」と「鐵罐施食」との關連性を示したい。三、「玉陽施食」の再編した内容を踏まえつつ、それが長春派との關係をどのように結び付けており、どのように長春派の特徴を示しているのかを考察したい。

## 道教における慈航（観音菩薩）観について

陳 怡安（駒澤大學佛教文學研究所研究員）

観音菩薩は廣く信仰され、また「半個亞州的信仰（アジア人の半數が信仰している）」とも言われている。観音菩薩は、現在の中國の道教の寺觀でも信仰され、「慈航真人」と稱されている。

慈航真人の記念日（誕生日や成道日）では、中國の寺觀は法要を行い、「慈航真人圓通自在天尊寶誥」などの頌を唱える。その「慈航真人圓通自在天尊寶誥」は、『懺法大觀』の「碧落慈航寶懺」（玉府闡教妙達真人孟珙撰）の一部であり、『重刊道藏輯要』に収録されている。孟珙は、「七真道行碑」（光緒十二年（一八八六年））という碑文を作り、「碧落慈航寶懺」も十八―十九世紀に『重刊道藏輯要』に收められたため、十八―十九世紀の人であると推測される。

観音菩薩（慈航真人）と道教の関係については、一部の先行研究は、観音菩薩（慈航真人）は道教の經典『靈寶經』に由来すると指摘している。しかし、それらの先行研究が指摘している唐の李善が注釋にて引用した『靈寶經』の該當部分には、観音や慈航を指す證據がない。

論者は、観音菩薩が道教の慈航真人になった原因を探るため、道教と佛教の文獻をはじめ、中國の小説『西遊記』（十六世紀頃成立）、『封神演義』（十六―十七世紀頃成立）と『歷代神仙通鑑』（明末清初の徐道によって編纂

された)に登場された観音菩薩(慈航道人や慈航真人)の記述を考察した。

『封神演義』では、後に観音菩薩となった「慈航道人」は、道教の最高神である元始天尊の十二弟子の一人であり、武功が高い人物として描かれ、戦いにおいて闡教側の助太刀をする。また、柳の枝と甘露が入った「清淨琉璃瓶」を持ち、瓶を逆さにして敵をその中に閉じ込める力を持つ。なお、『封神演義』の内容と一部相似している『歷代神仙通鑑』でも、観音菩薩のことを慈航と稱している。

一方、『西遊記』の観音菩薩は主人公である玄奘の守護神として現れる。特に、孫悟空ら玄奘の弟子は、危機の度に観音菩薩の居所を訪ね、観音菩薩の助けを借りて苦難を逃れる。

上記の小説は、観音菩薩の修行地が普陀山とされているが、中国ではもう一つ有名な観音聖地がある。それは、上天竺寺の普明禪師撰とされる『香山寶卷』で現れた「香山」という観音の聖地である。『香山寶卷』は、蔣之奇が撰した『香山大悲菩薩傳』(北宋元符年間成立)を参考にしており、明代では『南海觀音全傳』(十六―十七世紀頃成立)という小説に改編された。ところが、現在の慈航の法要で讀まれている『懺法大觀』の「碧落慈航寶懺」では、「普陀留蹟圓通自在天尊」や「香山慈姥圓通自在天尊」といった表現が見られ、「普陀」と「香山」も慈航(観音菩薩)の懺法において記されている。

本発表では、以下の問題について考察していきたい。

- 一. 小説や佛教經典が道教に與えた観音への影響について。
- 二. 小説における観音(慈航)の救済方法と、佛教の經典に見られる観音の教えとの違いについて。
- 三. 観音菩薩がなぜ道教の神となったのか、さらには道士たちの観音菩薩觀についても考察していく。

## 早期の城隍神信仰の確立と流布についての考察

張 琦（四川大學文化科技協同創新研發中心）

城隍神は中國古代の道教信仰體系における重要な神祇である。本発表は歴史文獻の整理と分析を通じて、戰國時代以降の民衆の都市への歸屬觀念の興起、漢末から南北朝時代にかけての戰亂の影響などの要素を総合的に分析し、城隍神信仰の確立が多くの要因の相乗効果による結果であると考察する。戰國時代から漢末にかけての民衆の身分歸屬意識が城隍神の發生の基礎的要因であり、漢代以降の賢聖英雄を仙として認識する傳統が各地の城隍神の選定に重要な影響を及ぼした。

その發生地域については、城隍神信仰に言及した最初の三つの記録は全て直接または間接的に古代の郢州に關連しており、その後の文獻資料は、城隍神の信仰がこの地域を中心に長江沿いに東西へ擴

散し、さらに南方へ広がったことを示している。遅くとも九世紀中葉には、城隍神信仰は南中國の大部分に広がっていた。

信仰の傳播過程において、城隍神の名は南朝の著名な僧侶慧思の『受菩薩戒儀』に現れ、皇帝を含む多くの信徒が菩薩戒の儀式を行った。佛教と道教の兩方が、これに積極的な推進役を果たした。

「二十四孝」における道教の影響——董永説話の織女のイメージを中心に

宇野 瑞木（専修大學）

「二十四孝」は中國古代の孝子の事蹟を二十四集めた説話集である。現存する最古の「二十四孝」の記録は故圓鑑大師による敦煌文書「二十四孝押座文」であり、唐末五代頃までには成立を見たことが明らかである。現存最古の版本としては中國國家圖書館藏の元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』（明初刊）が知られており、この他に高麗版『孝行録』及び明代に陸續と刊行された『日記故事』系統の版本の巻頭に掲げられた「二十四孝」が流布した。「二十四孝」は孝思想を廣める役目を果たす説話集である以上、儒教思想が基盤となっており、その成立においては、その最古の記録が佛教徒の圓鑑大師によるものであったように佛教徒が大きく関わっている可能性が高く、この點については既に議論が重ねられてきた。一方で道教の影響に関しては、これまで十分に論じられてきたとはいえない。

したがって本発表では、「二十四孝」の中でも特に道教的展開がみられた董永説話に注目し、「二十四孝」における道教的な要素について検討したい。董永は古代中國の孝子の一人で、董永の至孝によって天から降りてきた織女

が妻となって援助するという所謂天人女房譚である。古くは後漢墓にその圖像が確認され、續く六朝期の墳墓からも線刻畫が多く出土しており、早くから視覺化を伴って享受されてきた説話でもある。翻って日本では、兩孝子傳（船橋本・陽明文庫本）、『蒙求』等によって平安期頃には知られるところとなっていたが、十四世紀以降舶來した二十四孝關連の諸版本によって五山僧周邊を中心にその插圖のイメージも享受されるようになった。なお日本で二十四孝圖が繪畫化されるのは十六世紀まで下り、和文化されたお伽草子（嵯峨本）が江戸極初期に刊行されて以降、雲に乗って天へと歸る織女を地上から董永が見送るイメージが廣く定着していった。

本説話は、孝子傳や二十四孝に所收される一説話としては、當然ながら董永の孝が主題であり、織女の援助もその孝感の一環に過ぎないが、説話の傳播過程においては織女の天上的性格が大きな求心力を擔ったことが想像される。そこで本發表では、董永説話の孝子譚という枠組の中の可變部分でありながらも、一方では説話傳播の核ともなった織女の天上性について検討したい。特に、從來本文研究が蓄積されてきた一方で、説話の圖像を併せて検討されることが殆どなかった状況を踏まえ、織女が圖像においてどのように描かれてきたのかという点にも着目したい。天地を往還する女性がどのように飛翔すると具體的に想像されたのかという問題は、繪畫表現において初めて確認できる側面も多く、文化的思想的基盤を把握する上で重要な視點と考えている。

また、本説話の圖像化が確認される日中以外の韓國・ベトナムなど東アジアでの董永説話の繪畫化の様相についても、併せて検討したい。

## 北京大學藏西漢竹書『周訓』の文獻的性格

草野 友子（大阪公立大學）

二〇〇九年に北京大學が入手し、二〇一二年から釋文・竹簡圖版の公開が始まった「北京大學藏西漢竹書」（以下、北大漢簡）には、六藝類、諸子類、詩賦類、兵書類、數術類、方術類など多岐にわたる文獻が含まれている。そのうちの一つである『周訓』（「訓」と同義）は、「周昭文公」（戰國中期の東周の君）の「共太子」に對する訓戒が記された文獻である。全體は十四章で構成され、そのほとんどが竹簡の冒頭に墨點「・」が附された上で、「維歲〇月更旦之日、共大（太）子朝、周昭文公自身貳（敕）之、用茲念也。曰」（〇）には月の數字が入ると始まり、末尾は「已學（教）、大（太）子用茲念、斯乃受（授）之書、而曰自身屬（囑）之曰、女（汝）勉毋忘歲〇月更旦之訓（訓）」と締め括られている。それぞれの章には堯・舜・禹から戰國時代中期に至るまでの歴史故事が記されており、傳世文獻に未見の殷の湯王から太甲、周の文王から太子發（後の武王）への訓戒や、楚・越・晉・秦・趙・魏・齊に関わる故事、國を治める君の道を述べた長編の文章などが含まれている。整理者はこの文獻

について、『漢書』藝文志・道家類に見える『周訓』十四章」であり、戦国時代後期から漢代初期に流行した道家の黄老學派のものであると見なしている。しかし、先行研究においてすでに北大漢簡『周訓』と『漢書』に見える道家類の『周訓』とは同一文献ではない可能性が指摘されている。

発表者は以前、『周訓』に引用されている『詩』の内容を中心に検討し、その思想的傾向について考察した。そして、『周訓』が引用する『詩』の多くは具體的な故事との對應があり、これは戦国時代から漢代初期にかけての儒家が『詩』を引用する際にしばしば見られる方式であり、黄老學派の習慣ではないと推測した。また、『周訓』における『詩』の引用部分には國を治める君としての在り方、徳の高い理想の君主について述べられており、儒家の思想に近いのではないかと考えた。ただ、これらの推論は『周訓』に引用されている『詩』とその關連する故事についての考察にとどまったものであり、『周訓』には傳世文献の引用が多數見られるため、それらを含めて総合的に検討する必要がある。

そこで、本発表では、北大漢簡『周訓』全體を釋讀した上で、その文献的性格について考え、この文献を黄老文献と見なせるか否かについて再度検討を試みたい。

## 上清經の仙樂と魏晉音樂

吳 雨桐（東京大學大學院）

『無上祕要』卷二十の仙歌品・靈樂品と『上清道寶經』卷三の妓樂品には、眞仙たちが降臨する時の宴會音樂と仙歌が収録されている。その内容は、ほぼ上清經から引用している。『眞誥』・上清内傳をはじめとする上清經の中では、神仙の世界で宴會を開き、仙女が様々な樂器を演奏し、高位の眞人たちが自ら五言詩の仙歌を歌い、時には舞う場面がよく見られる。

上清經の仙樂の形式は、漢末魏晉の宮廷音樂に似ていると言える。秦漢以前の儒家傳統的な禮樂制度・宮廷音樂には、音樂による秩序の觀念が明らかで、位の高い皇帝や貴族が自ら歌い舞うことはほとんど見られない。漢末魏晉からは、新しい音樂の導入とともに、音樂形式の變容が生じてきた。相和歌・清商樂の流行に伴い、貴族や知識人が音樂創作・演奏の主體となる傾向が見られる。

上清經に見られる仙樂には、その時代の相和曲や清商樂に似た要素が多く含まれている。樂器の配置において、上清經の仙樂には璫・琴・簫・笙・節・鐘・鼓・磬・石がよく使われている。これは『樂府詩集』に述べられた絲竹金石を主とし、節でリズムを取りながら歌う相和曲の演出形式に類似している。『南嶽司命紫虛元君魏夫人内傳』

には、位の高い太極真人・扶桑神王・方諸青童・清虛真人が次々に歌を歌い、また降臨する真人のリーダーである西王母が自ら歌い舞う場面が描かれている。これは魏の三祖が自ら相和歌を作り、清商樂と合わせて演出し、宮廷宴會で皇帝と貴族たちが同じテーマについて相次いで詩歌を作ることに似ている。清商樂の演奏者はほぼ女性の樂妓であり、上清經の中に樂器を演奏する人物もだいたい侍女、玉女など位の高くない女性である。

上清經の音樂場面は、教えを傳授することと結びついている。『太真玉帝四極明科經』などには、真仙の間で經典を傳授する際に、仙樂が演出されることが多い。上清真人内傳において、真仙が修行者に降臨する時、修行法や經訣を授けた後、だいたい修行者のために仙樂を作り、高位の真人が五言詩の仙歌を歌う。その五言詩は主に大道の奥深さ、精勤修行の効果、天上世界の美しさ、仙人生活の樂しさを説き、玄言詩のようなものである。それは靈樂仙歌によって修行者を勵ます意味がある。上清經の仙樂の役割を考えると、儒家の禮樂教化思想の影響が見られると言える。仙樂によって修行者を動かし、仙歌によって修行の効果を示し、修行者を授かった修行法に專念させる意味があるだろう。

六朝の佛教にも飛天伎樂がよく見られる。その演出形式は上清經の仙樂に似たようなところがあるが、佛へ伎樂供養を中心とし、修行者に傳授するためのものとは異なっている。

上清經における仙樂は、従來の儒家音樂思想の影響を受け、魏晉時代の新しい音樂形式を取り入れ、上清經法の傳授を助ける道教独自の音樂形式である。

林羅山の林希逸『老子虜齋口義』受容——林羅山『老子抄解』を中心に

李麗（名古屋大學博士研究員）

宋代の儒學者林希逸（一一九三―一二七二）の老子注釋『老子虜齋口義』が江戸初期に大流行したのは、林羅山（一五八三―一六五七）の稱揚によるものである。林羅山は江戸初期の日本思想史上において重要な人物で、幕府お抱えの儒者林羅山の老子理解は江戸幕府の老子理解を代表するものである。

林羅山の老子觀については、大野出氏（『日本の近世と老莊思想』、ペリカン社、一九九七）の研究の蓄積がある。林羅山が林希逸『老子虜齋口義』に「頭書」を附けて出版したものは道春點『老子虜齋口義』と呼ばれるもので、さらに『老子』の和訳も刊行されている。『老子抄解』は正保二（一六四五）年林羅山六十三歳の時、將軍家光の御命令で林希逸『老子虜齋口義』を日本語に譯したものである。『老子抄解』は林羅山による林希逸の『老子虜齋口義』の和文譯であるが、日本語に翻譯の過程において、林羅山の取捨選擇がなされ、さらに林羅山自身の理解に

よって、補う部分が見られる。

本發表は、今までの先行研究で行わなかった、林羅山『老子抄解』と林希逸『老子虞齋口義』の比較によって、まず、林羅山が『老子虞齋口義』を省略した部分と林羅山の理解で補った部分を明らかにする。次に、林希逸『老子虞齋口義』の原文と林羅山によるその解釈と比較し、林羅山の取捨選擇について考察することによって、林希逸の主張と林羅山の主張の異同を示す。最終的に、これらの考察によって、林羅山の林希逸『老子虞齋口義』受容の特徴を明らかにする。

勞思光の術數觀——「義」と「命」をめぐる言説の一環として

水口 拓壽（武藏大學）

思想家及び思想史學者として知られる勞思光（一九二七～二〇二二）は、湖南長沙に生まれ、長じて香港中文大學、臺灣の國立清華大學などで教授職を歴任した。大著『中國哲學史』（一九六八～八一、新編一九八四～八六）を初め、半世紀餘にわたって多數の著作を送り出し、その所論は、洋の東西に跨る幅廣い視野に基づくものであった。

本發表では、勞氏の著作から特に術數に關するものを取り上げ、分析と考察の對象とする。彼が直接に術數を論じた文章は、數量の面では相當に少ない。發表者の知る限り、論文或いは評論の形式を取った「絶倒芳時虚度」―我以術數自娛（一九九二）と「關於術數的反省」（一九九三）を除けば、新聞掲載コラム「閒話「術數」」・「再談「術數」」・「談「命運」」・「談「機遇」」（一九六三～六四頃）、及びインタビュー記録「術數・古老傳統與新領域―訪勞思光教授」（一九九二）を數えるばかりである。しかしこれらは、二〇世紀の知識人が術數を一定程度に肯んじた例として貴重だけでなく、他ならぬ勞思光という人物の、「義」と「命」をめぐる思想的營爲の一環とし

て注目<sup>に</sup>値すると言<sup>え</sup>る。

勞氏は、自ら術數を「娛<sup>たの</sup>しむ」者であることを表明し、またその經驗に基づいて、算命などの方法を用いた未來豫測がしばしば的事中することを主張した一方、術數に對する自身の態度は單純でないとも述懐している。理由の第一として、彼は術數が概念的な思考と精密なシステムを持ち得るとはいえ、畢竟科學性を缺き、經驗世界についての確實な知識とは呼び得ない點を擧げた。要するに、占つて當たる根據は説明できないというわけである。これは術數自體の本質に關する見解だが、勞氏は術數の全面肯定を避ける理由の第二として、更に、術數が人を「命（各人に作用する客觀的制約）」の過度な重視と、「義（各人に備わつた意志の自由、とりわけ是非判斷における主體性）」の輕視に走らせやすい點を擧げた。こちらの脈絡に沿つて、彼は行爲の決斷に術數を利用してはならないといふ、人に即した術數の存在意義（人と術數の正しい附き合ひ方）に關する見解も示している。

勞氏の思想史研究によれば、かつて孔子は、人の行爲を左右する「義」と「命」を上記の通りに辨別した上で、人は「命」の不可抗力に意識を向けつつも、あくまで「義」に立脚して自己を主宰するべきだと唱えた。そして、孔子に始まる「義命分立」の考え方こそが、中國思想の本流となり、ひいては中國文化の眞髓となつたのである（『中國哲學史』第一卷ほか）。このように解釋され、評價された「義命分立」を自身の思想的立場としても受け入れた彼は、おのずから「命」の存在を認め、加えて「命」を觀察する術數の仕組みにも關心を抱いた。だが、人の行爲は「義」に照らして決斷されるべきという基本姿勢は固く、故に術數を、決斷に影響しない程度に「娛しむ」對象と位置づけたのだつた。

## 第七十五回日本道教學會大會記念講演

フランス人と極東の認識——ポール・クロードルを中心に——  
コネサンス

根岸 徹郎（専修大學國際コミュニケーション學部長）

十九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、植民地の擴大を目指すフランス第三共和國はインドシナ半島から中國へと進出し、さまざまな方法で政治・經濟的ならびに文化的な關係をその地で築いていった。そうした状況において文化外交の進展は目指すべき重要な柱とされたが、そこには二つの目標があった。ひとつはヨーロッパ文化を啓蒙的にアジアにもたらすことであり、もうひとつが對象とされる地域の文化の研究を積極的に行うことでフランスの文化水準の高さを内外に示すという、一種のプロパガンダ的なものだった。とくにこの分野においては、ハノイに置かれたフランス極東學院を中心とした東洋學者、すなわちオリエンタリストたちの活動が重要な役割を果たした。今回の発表では、こうしたフランス第三共和國の文化外交に注目した上でインドシナ、中國、そして日本で活動したフランス人に目を向けた。その中でも檢證の中心に据えるのは、ポール・クロードル（一九六八—一九五五）である。二〇世紀フランス文學を代表する詩人、劇作家として知られるクロードルは同時に優れた外交官であり、また熱心なカトリック信者でもあった。一八九五年から一九〇九年までの十四年に互って上海を皮切りに福州、漢口、天

津など中國各地に滞在した經驗を持ち、一九二一年から二七年まで駐日フランス大使として東京に赴任したクロードルは、まさに實地で「東方の認識 (connaissance de l'Est)」を得た者と呼ぶにふさわしいフランス人だったといえる。

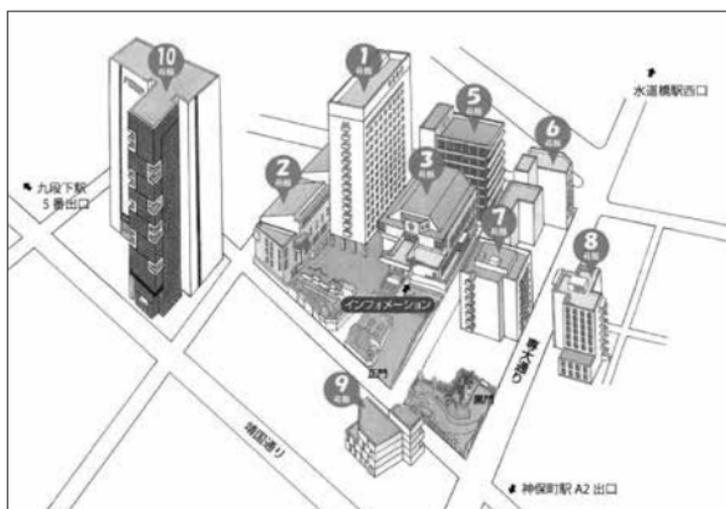
實際、上海時代に英語譯による『道德眞教』を讀み始めて以來、自作品の中でも具體的な言及を試みるなど道教への深い關心を示していたクロードルは、日本赴任後もその思索を深め、詩作や富田溪仙といった畫家との交流を通して独自の東洋觀を育み、作品として結實させていく。

その一方で、文化外交を擔う外交官としてのクロードルはフランス極東學院と連絡を取りつつ、日本で東京の日佛會館ならびに京都の關西日佛學院を設立するといった活動に積極的に従事している。

このように外交官としてのアジア滞在經驗や文學者、カトリック信者としての視點といった特異性も含め、公私においてフランスの文化外交の両面性を體現したかのようなクロードルの活動と作品に目を向けることは、二〇世紀初頭前後のフランス人による東洋の認識とその受容を考え、さらに今日のわたしたちにとっても示唆に富んだ貴重な視座を得る道を拓いてくれることだろう。

根岸徹郎・專修大學國際コミュニケーション學部教授。専門は二〇世紀フランス文學および現代演劇。主な研究対象はジャン・ジュネならびにポール・クロードル作品。パリ第四ソルボンヌ大學においてクロードル研究で文學博士號を取得。論文に「ame/ombre/double」とクロードルの演劇―「植輪の國」を手がかりに、「ジャン・ジュネと演劇―見ることと書くこと」の結節點として」など。翻譯にE. ホワイト『ジュネ傳』、J. ジュネ『公然たる敵』(ともに共譯)など。

## 専修大学神田キャンパス見取り図



参加は無料ですが、必ず受付にお越しください。受付は10号館3階です。

弁当を申し込まれた方は、受付でお支払いください。(釣り銭のいらないように、御協力ください)

弁当の配布は休憩所（5階10051教室）です。

協賛書店が、5階10052教室に出展されます。

懇親会は、研究発表と同じ号館（10号館）の最上階（16階）です。

<https://www.senshu-u.ac.jp/about/campus/>



# 神田キャンパス

■JR線

## 水道橋駅

西口より徒歩7分

■東京メトロ東西線、半蔵門線、都営地下鉄新宿線

## 九段下駅

「5」出口より徒歩1分

■東京メトロ半蔵門線、都営地下鉄新宿線、三田線

## 神保町駅

「A2」出口より徒歩3分



東京駅から水道橋へはJR総武線（黄色い電車）各駅です。  
中央線（赤い電車）は停りません。

東京駅から神保町ないし九段下へはメトロ丸の内線（赤いライン）ないしは徒歩で大手町に行き、メトロ半蔵門線（紫のライン）で渋谷方面へ一駅ないし二駅です。

東京駅丸の内口からタクシーで専修大学神田キャンパスまで約2000円、15分です。

日本道教學會 第七十五回大會要項

發行日 令和六年十月十日

發行者 日本道教學會 第七十五回大會準備委員會 委員長 鈴木健郎

〒一〇一―八四二五 東京都千代田區神田神保町三一八

專修大學國際コミュニケーション學部 鈴木健郎研究室內

## 出張依頼状

日本道教學會第七十五回大會を、来る十一月九日（土）に専修大學神田校舎において開催いたしますので、  
貴学  
氏をご派遣いただきたく、依頼申し上げます。

令和六年十月十日

日本道教學會 會長

森 由利亞

第七十五回大會準備委員長 鈴木 健郎

殿



---

〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8  
専修大学国際コミュニケーション学部 鈴木健郎研究室内

**日本道教學會第75回大會準備委員會**

E-mail [thc0729@senshu-u.jp](mailto:thc0729@senshu-u.jp)

---